

2017年度マリンバイオテクノロジー学会 若手の会シンポジウム報告

このシンポジウムは従来開催されておりました講演会を2014年度から若手の会が企画・運営を行うようになったもので、今回で4回目となります。毎回、若手の会では企画のコンセプトとして「今、この先生または研究者の話を知りたい!」という呼びかけで行っており、今回も広い領域の中から講師の先生を2人選出しました。1人目は、水族養殖学の研究から東京海洋大学海洋生物資源学部門助教の遠藤雅人先生に、2人目は、真核生物の進化に関わる研究から京都大学大学院地球環境学助長の神川龍馬先生にご講演をお願いしました。

シンポジウム当日の11月21日は雲一つないほどの晴天に恵まれ、会場の東京海洋大学品川キャンパスには当日参加を含めて76名の参加者が集まりました。竹山春子会長の開会の挨拶に続き、遠藤雅人先生から「物質循環型水産養殖システムの開発」、神川龍馬先生から「“非”光合成性珪藻類：進化・多様性・応用への展望」という演題で質疑応答を含めて、1時間ずつ講演をして頂きました。

遠藤先生からは、水産養殖 (Aquaculture) の「アクア」と水耕栽培 (Hydroponics) の「ポニックス」からの造語である「アクアポニックス」と呼ばれる複合型の食料生産システムについて紹介がなされ、クエ (西日本で漁獲されるハタ科魚類の高級魚) を閉鎖循環式養殖システムで飼育し、その飼育排水を用いて海ぶどうやアイスプラントを生産する研究についてお話し頂きました。さらに、物質循環型クルマエビ種苗生産や乾燥地域における塩分を含む農業用水の多段利用による食料生産としてメキシコで現在行われている共同研究についても興味深い話を聞くことができました。続いて、神川先生からは、光エネルギーを化学エネルギーに変換する光合成の機能を喪失した非光合成珪藻に関してご講演いただきました。珪藻を含む微細藻類は非常に広範な系統群を含む生物のカテゴリーですが、光合成を行うという共通点でつながっています。その光合成をやめてしまった珪藻はどのように進化したのか、光合成を行わなくなった葉緑体は現在どのような代謝を担っているか、ゲノミクス、トランスクリプトミクスなどに基づいた大変興味深い解析結果をご紹介いただきました。さらに、非光合成珪藻による有用物質生産などの応用研究への展望についてもお話しいただきました。参加者からは質問時間が足りなくなるほどの多くの質問があり、ご講演に対する関心の高さがうかがわれ、盛況な講演会となりました。

シンポジウム終了後、東京海洋大学品川キャンパス生協食堂にて懇親会が行われ、講師の先生2名を含む30名が参加しました。当学会の副会長である東京大学の岡田茂先生に乾杯のご発声を頂いた後、ご講演の先生方を取り囲み、和やかな雰囲気の中で親睦を深めることができました。至らぬ点もあったと存じますが、今回の若手の会シンポジウムと懇親会は参加して頂いたみなさんにとって有効有益な場になったのではないかと認識しており、今後もこのようなシンポジウムを企画・運営していきたいと考えております。

若手の会シンポジウム企画担当 寺原猛・前田義昌



講演をする遠藤先生



講演をする神川先生